

# 国語教育は変わるのか～新しい時代を生きる力～

青山学院大学経済学部教授  
岸田 一隆



## スポーツ選手へのインタビュー

私はスポーツが大好きだ。だが、試合が終わったあとのインタビューは必ずしも好きではない。なぜなら、日本においてはインタビューの質問が以下のような感じだからだ。

「得点を取ったときのお気持ちはいかがでしたか？」  
「今の気持ちを誰に伝えたいですか？」

スポーツを愛好する視聴者にとつて、気持ちを知ることにとりだけの意味があるだろうか。

だが、海外のインタビューはこうではない。「あなたがボールを持ったとき、パスという選択肢もあったはずですが、シュートという判断を下した理由はなんですか？」

「守備の選手二人があなたをマークしていたはずなのに、一瞬にしてフリーで抜け出した、そのテクニックについて教えてください？」

日本と海外のインタビューの違いはなぜ生まれたのか。人間の気持ちを過剰なまでに重視する日本人の特性はどこから来ているのか。

## 国語教育

この疑問を解くためのヒントが山崎正和氏の言葉の中にあつた。それは、拙著『科学コミュニケーション』（平凡社新書）の「国語教育」というセクションにも引用した以下のような文章である。「現代の中等教育では、読み書きともに情緒的な文章が偏重され、意見を読み取ること、感想を述べることに過剰な力点が置かれている。二

流の文学教育が国語教育と混同されて、外界の事物を客観的に記述する訓練がおろそかにされている」（『論壇時評朝日新聞夕刊、一九九七年七月三十一日』）  
「意見を読み取ること」、「感想を述べること」に過剰な力点を置くことによる問題を考えよう。まず、「感想を述べること」を重視しすぎることの弊害である。大学で、科学技術の記事に対する論述を求めると、論述ではなく、「すごい技術だと思いました」という感想で終わってしまうレポートを提出する学生が多い。感想を持つことはかまわないが、感想と「事実や根拠に基づく論述」とはまったく違うものであることが理解されていない。さらに、現代の日本の生徒たちは、ネット上に存在する「感想文テンプレート」を参考に感想文を書いていることが多く、行為自体が形骸化していると言えよう。

次に、「意見を読み取ること」の無意味さだ。文意を正確に読み取ることが、読む訓練として重要なことだ。だが、作者の意見や考えや気持ちは文章だけから読み取ることができないことがある。一例として、私の文章が入試問題の題材に使われたときのことだが、設問は「作者の考えにもっとも近いものはどれか」というもので、作者である私が解いたところ不正解に終わった。この設問は「以下の選択肢のうち、作者の考えにもっとも近いと設問者が読み取ったものはどれか」に訂正すべきであろう。だが、これはもはや解答者には答えようがない。

### 国語教科書と取り扱いが変わる

令和四年度から高校の国語の教科書が変わる。令和三年度まで「国語総合」という科目だったものが、「現代の国語」と「言語文化」という構成に分かれるのだ。大きな違いは、それまで「現代文」の中に配置されていた近現代の文学作品が「言語文化」に移ることである。

学習指導要領によると、「現代の国語」に採用されるべき教材は、論理的な文章および実用的な文章ということで、一見すると山崎氏の言う「情緒的な文章が偏重され」という問題が解消されているように見える。

だが、私にはそれよりも大きな変更が指導要領の中にあると考える。それは「内容の取り扱い」である。

論理的な文章が教材として採用される「現代の国語」において、「読むこと」は10〜20単位時間に過ぎない。それに対して、「話すこと・聞くこと」は20〜30単位時間、「書くこと」は30〜40単位時間である。つまり、インプットよりもアウトプットに重きが置かれている。論理的な文章をきちんと正しく読み取るとは基本中の基本であるが、それらの文章教材は、ある意味、アウトプットのための材料だとも言えるのだ。

サッカーの試合をどれだけ観たところで、サッカーに対する理解は、実際にプレーをした経験がある人間ほどには深まらない。スポーツに限った話ではない。芸術でも料理でも何でもい

い。実践という形のアウトプットは対象に対する理解を段階的にする。

同じことは文章に対しても適用できる。すなわち、アウトプットを積極的に行うことによって、論理的思考に対する理解と習熟が大きく深まる。特に、書き言葉は話し言葉に比べて抽象度が高く、書く訓練は思考の抽象度も高めてくれるだろう。山崎氏の言う「外界の事物を客観的に記述する訓練」が活きてくるのだ。こうした指導のやり方の変化が、国語教育を本来の意味で変革してゆくことだろう。

### 文芸作品に対する誤解

しかしながら、「言語文化」の「内容の取り扱い」に関しては、「話すこと・聞くこと」は0単位時間、「書くこと」は5〜10単位時間で、「読むこと」は古典・近現代合わせて60〜65単位時間である。すなわち、圧倒的なインプット重視である。

多くの文芸作品に親しみ、多くの感動を得ることは人生において大切な体験であり、それを否定するつもりはない。だが、ここには文芸作品をはじめとする芸術一般に対して大きな誤解があるように感じる。それは、文芸作品は情緒の範疇に属するもの、心で味わうものだという考えである。

実際には、作家が行っている執筆活動はきわめて論理的で知的な行為である。多くの時間を

調べるものやインタビューに費やし、観察や分析を重ね、それを正確に文字に変える。構成や筋書きに工夫を重ね、細部に自分独自の技術を加える。もちろん、外界の事物を客観的に記述する訓練は欠かせない。一見、主観的に見える文章ですら、人間の主観的な心理を客観的に記述しているのだ。

まず、文学を好きになってもらうことは大切だし、心理の機微を感じとる感性や情緒も大切だ。だが、それだけではもったいない。文学作品を真に理解して深い部分で楽しむためには、「文学のアウトプット」の経験が必要だ。

国語教育の限られた時間で高校生に創作せよというのは無理難題かもしれない。だが、ある程度読む訓練をしたら、その書き方を分析すべきではないか。創作の作法・技術・作品の構造について深く考え、単なる感想文ではなく、文芸批評を試みるのはいかがだろうか。

### 新しい時代に向けて

科学的知識や正しい情報やコミュニケーションが、現代社会を生きてゆく上でますます重要になってきた。「しっかりと読むこと」「頻繁にアウトプットすること」「客観的な目を持つこと」。これらの能力が来たるべき時代の人材にとって欠かすことのできないベースとなるであろう。国語教育は本質的に重要なのだ。